



An analysis of mother-of-pearl inlay techniques used in lacquerware exported in the 19th century

日高 薫・小瀬戸恵美

① はじめに

② 伏彩色螺鈿技法の源流と展開

③ 資料について

④ 調査方法と調査結果

⑤ 考察

⑥ まとめ



日本を代表する工芸品である漆器は、古くは16世紀末からヨーロッパに輸出され珍重されてきた。日蘭貿易では京都で制作された漆器が多く輸出されたが、後には長崎の漆工芸がさかんとなり、長崎産のものも輸出されている。長崎の漆工芸の特色は青貝細工とよばれる伏彩色をもちいたもので、この伏彩色螺鈿による漆器は19世紀に入ってから大量に輸出された。近年美術史的な観点から研究が進められてきているが、技法としての伏彩色螺鈿やその材料に関してはいまだ不明な点が多い。

本研究ではこれら伏彩色螺鈿技法をもちいた漆器の技法、素材を明らかにするべく、実体顕微鏡、金属光学顕微鏡、エネルギー分散型X線分析装置をもじいて分析をおこなった。その結果、さまざまな技法が観察されるとともに、素材面においては染料のみならず顔料も使用されていることが明らかとなり、このような観察結果を踏まえると、19世紀に行われた螺鈿技法の呼称としては、「染色螺鈿」より「伏彩色螺鈿」とする方が適当かと思われる。

また、素材分析からは、青色顔料に輸入顔料であるウルトラマリンブルーを使用していることや、体质顔料を使用するという西洋画の技法も観察されるなど非常に興味深い結果が得られた。本調査の対象資料数は限定されているため、本報での議論は現段階では可能性の域をはず、また、様々な複合要因（工房、産地）を考慮しなくてはならないが、今後の継続調査により、様式観察からだけでは困難を極めている当該分野の資料の編年に役立つ情報を提供できるものと思われる。